

平成30年度分析化学系教科担当教員会議 議事録

日時：2019年3月22日（金）12:00～13:00

場所：幕張メッセ 国際会議場 1F M会場（部屋番号105）

世話人：東京理科大学薬学部 東 達也

出席者：別紙の通り87名（89名の出席を予定していたが、急遽2名の教員が欠席）

世話人挨拶（12:00～12:05）

東京理科大学薬学部 東 達也より、平成30年度の分析化学系教科担当教員会議の世話人であることの挨拶及び事務連絡がなされた。また、次年度の会議に向けて、分析系教科担当教員の登録（薬学教育協議会の名簿）の際にメールアドレスなどの間違いがないよう、お願いがなされた。

議題：

① 意見交換（12:05～12:30）

1) 学生が「研究能力」を身に付け、高めていくため、2) 「研究能力」や「教育能力」を持った薬剤師を輩出するため、3) 薬学の分析化学教育者を育てるため、に行っている分析化学教育の工夫や、それらに対する意見、など。

まず、世話人の東京理科大学 東 達也より、以下の通りの説明があった。

『多くの薬学科の目的やディプロマポリシーには、「高度化する医療に対して貢献することのできるヒューマニティと研究心にあふれた高度な薬剤師の養成」などの文言がある。また、薬剤師として求められる10の資質の中に「基礎的な科学力」、「研究能力」、「自己研鑽」、「教育能力」がある。このような背景から、分析化学（科学）領域で薬剤師免許と博士の学位の両方を有する人材や、将来の薬学の分析化学教育を担当する人材を輩出するにはどのような方策が考えられるか、分析化学教育では何をすべきか、をこの会議で議論・意見交換したい』

これに対し、

静岡県立大学 轟木堅一郎 先生：研究者養成のために、薬学会の支部大会などを活用して、多少無理をしても早めに（卒業研究開始1年以内に）学会発表を経験させることを実践している。学会では、我々教員が学生の発表に対してPNP（Positive-Negative-Positive）方式でこれまで以上に丁寧に対応・議論することも重要である。学生に自分たちの研究室だけでなく、“外”を見せるために学会のみならず、他校との合同セミナーも実施している。

九州大学 浜瀬健司 先生：6年制学科の学生も4年制学科の学生も区別なく研究させ、学会発表も行っている。

青森大学 三浦裕也 先生（分析化学担当教員ではなく、学部長の立場から）：留年する学生は分析化学が苦手な学生が多い。分析化学担当教員の授業は丁寧で難易度もそれほど高くないと

思われるが、何故か分析化学ができない学生がいる。どのような対策が効果的か模索中である。また、現場の薬剤師にも研究心・研究力は不可欠である。現場で働き始めた後に大学院進学を考え出す者もいるので、そのような人を大切に手当てすべきである。

武蔵野大学 川原正博 先生：武蔵野大学では成績優秀者に対して早期研究室配属制度がある。そのような学力、モチベーションの高い学生がいると、研究が進む。1, 2年生は研究に興味を思っている者が多く、これを持続させることが大切である。

就実大学 片岡洋行 先生：低学年は研究志向であるが、実務実習から帰ってくると急に研究に興味をなくす。理由を考察・検討すべきである。現在の教員の（雑務による）多忙を見て、学生が大学教員になりたいと思わなくなっているのではないか。教員が実験室に行き、実験して、研究する姿勢を見せるべきである。

明治薬科大学 小笠原裕樹 先生：CBT, OSCE, 実務実習によって卒業研究が分断されることにより、研究のモチベーションが低下する。大学教員が研究以外のことばかりに時間を取られ、大学教員が魅力のある職業・存在に見えない。薬学生の将来設計において、博士課程進学のメリットが明確に示されていない。これらの点を改善する必要がある。

などの意見が出された。今後も本会議などを通して継続的に議論・意見交換していくことになった。

② 薬学教育協議会からのお願い（12:30～12:35）

本間 浩 先生（薬学教育協議会代表理事，北里大学薬学部）から薬学教育モデルコアカリキュラム改訂について、まず、今後の大まかなスケジュールが説明された。そして、改定にはまだ時間があるものの、分析化学系科目のGIO, SBOについては、本会議が中心となって、議論を始めほしいとの依頼がなされた。これに対し、世話人から「2019年度以降の本会議の中で議論を始める」ことが提案され、反対意見は無かった。

③ 学会などの開催案内（12:35～13:00）

以下の学会などの開催案内があった。

1) 第32回バイオメディカル分析科学シンポジウム（BMAS2019）

川原正博 先生（武蔵野大学薬学部）

2) 第33回バイオメディカル分析科学シンポジウム（BMAS2020）

鈴木茂生 先生（近畿大学薬学部）

3) 31st International Symposium on Pharmaceutical & Biomedical Analysis（PBA2020）

浜瀬健司 先生（九州大学大学院薬学研究院）

4) 第29回金属の関与する生体関連反応シンポジウム（SRM2019）

米田誠治 先生（鈴鹿医療科学大学薬学部）

5) 15th International Symposium on Applied Bioinorganic Chemistry（ISABC15）

- 米田誠治 先生（鈴鹿医療科学大学薬学部）
- 6) 第26回クロマトグラフィーシンポジウム
片岡洋行 先生（就実大学薬学部）
- 7) 第41回日本光医学・光生物学会
友廣岳則 先生（富山大学大学院医学薬学研究部）
- 8) 次回の分析化学系教科担当教員会議
石濱 泰 先生（京都大学大学院薬学研究科）
- 9) 日本薬学会・韓国薬学会合同シンポジウム
大澤匡範 先生（慶應義塾大学薬学部）

④ その他

2019年度の分析化学系教科担当教員会議は、京都大学の石濱 泰 先生が担当することになった。石濱先生が挨拶され、薬学会年会期間中に本教員会議が開催される予定であることが述べられた。

以上